別表1

共同利用・共同研究拠点

名称	概 要
調査船「はす」	琵琶湖を対象とする学術研究、定期観測や実習に活用されてきた高速調査船。総トン数12トン、定員20名、航海速力22ノット。
大型分析機器（安定同位体比精密測定用分析システム）	炭素・窒素同位体比オンライン自動分析装置（元素分析計）、酸素・水素同位体比オンライン自動分析装置（熱分解型元素分析計）、GC/C（ガスクロ燃焼装置付き前処理装置）、LC/C（高速液体クロマトグラフ付き前処理装置）を装備した安定同位体比質量分析計DELTAV plusと、PreCon-GasBench II（自動濃縮装置付き気体導入インターフェイス）、炭素・窒素同位体比オンライン自動分析装置（元素分析計）、GC/C（ガスクロ燃焼装置付き前処理装置）を装備した安定同 位体比質量分析計DELTA V advantageの計2台が稼働している。
大型分析機器 (DNA分析システム)	DNA分析システムには、核酸抽出装置、DNAシーケンサー、定量PCR、PCR、超音波破砕機、プロイディーアナライザー、およびその周辺機器が導入されており。DNA・RNA・エピジェネティクス・倍数性解析を行うことができる。特に、非モデル生物を対象としたRNA-SeqやChIP-Seqについてのノウハウの提供を行っている。
シンバイオトロン	シンバイオトロン（シンバイオは生命の共生を、トロンは実験施設を意味する）は、従来の個体を対象とした環境制御装置ではなく、地球上の代表的な生態系における生物群集とその環境を対象とし、物理・化学・生物的複合環境を人為的に制御できる新しいタイプの生態系実験施設。シンバイオトロンを用いて、生物多様性の維持機構、崩壊過程および生物多様性と生態系機能との関係を実験的に明らかにすることを目的として設置。
実験圃場および 森林区（CERの森）	約36,000㎡の面積があり、実験圃場・林園・鉢棚・森林区（CERの森）・実験池がある。圃場・林園では、露地およびビニールハウスを利用した植物の育成、生態学的な操作実験、昆虫採集などが可能である。森林区（CERの森）は、研究用に整備された二次林で樹木や野草の観察が可能となっている。実験池は、魚類の飼育、操作実験などに使われている。
生物標本	京都大学理学部附属大津臨湖実験所および京都大学生態学研究センターの事業として、琵琶湖の生態系や生物の生態・生活史の長期変動を把握することを目的に、1962年から固有魚種であるイサザをはじめ、プランクトンおよびベントスを収集・保存したもの。
データベース	京都大学理学部付属大津臨湖実験所および京都大学生態学研究センターの事業として、1965年から月に1回行われている定期観測のデータを電子化したもの。2000年4月までは琵琶湖の北湖1定点と南湖3定点において、同年5月以降は北湖1定点において実施されており、水温、ｐH、透明度、溶存酸素濃度、クロロフィル濃度のデータが利用できる。